セルフ・ポートレイト写真がもたらす自意識の変容
ー人はなぜ自画像を求めるのかー

東京藝術大学大学院美術研究科
博士後期課程学位論文
美術専攻 先端芸術表現領域
学籍番号　1316927
坂口真理子

要旨

本研究は自分自身を撮影した写真、「セルフ・ポートレイト写真」において、被写体でもある撮影者の目的と社会的役割がどのように変化したのか、また、撮影者にどのような意識の変容に影響をもたらしたのか、博士展作品《世界のひとつ》の制作と研究を通して論ずる。

写真が誕生してから既に200 年近くの時間が経ち、テクノロジーの発達とカメラの進化により世界のあちこちで日々膨大な枚数の写真が量産されている。中でも、人々がとりわけ多く撮影しているのはポートレイト写真ではないだろうか。そんな人物写真の中でも、自分自身を撮影した写真、「セルフ・ポートレイト写真」について本論文では言及していく。人々はセルフ・ポートレイト写真に何を求め撮影しているのか、時代の変化によるその目的と役割、撮影者の意識の変化を探っていく。

私は自己表現として自らの姿を写すセルフ・ポートレイト写真に関心を抱き制作してきた。その理由は、自分自身の姿は決して肉眼では見ることのできないものだからである。私たちは鏡を通して自分の姿を知っている。しかし、自分のことは十分に知っているつもりでも、私は外の世界から見える私自身の姿を見たことはないため客観視は難しい。自分自身と対峙するためには、自分の存在に対して内部から「意識」を働かせるのではなく、外部から「客観的に認識する」しようと考えた。自分自身を客観的に見るというのは、自分を俯瞰して見ること、つまり第三者の目線を持つことが大切である。私たちは日々の中で自分の姿を確認するのに鏡を用いているが、鏡に写る像は左右反転している上に、その中に映る自分の姿は動いているため、客観的に観察するには難しい。そこで、博士展作品では鏡と写真を組み合わせることを考えた。

本文は4章で構成されている。序章では、前提として本作の制作・研究に至った経緯と、私が博士展作品で目指すセルフ・ポートレイト写真について述べる。

第１章では、セルフ・ポートレイト写真の基本的な役割を確認した上で、写真黎明期における写真の特徴を検証する。肖像画が画家の力量や作風にその描写が左右されるのに比

べて、写真はカメラ前の自分自身の在り様次第で、写真の中での自分の姿をコントロールできることに人々は気づいた。また、写真の複製技術によって、自分の姿を記録するだけでなく、「写真を共有」するというコミュニケーションが生まれたことにより、写真に写る自分の姿を、他者に見る・見られる・見せるという、自分の姿への意識がより強く生まれはじめた。

第２章では、今日のセルフ・ポートレイト写真について述べる。写真は複製され外部へ共有されることが人々の共通認識としてある。誰もが気軽に写真撮影することが可能になった現代において、もっとも多く自分の姿を撮影しているのは記念日写真と証明写真である。その中でも、ウエディング写真とSNS上での自撮り写真を中心に、人々が自分の写真をどのような意図で撮影し使用しているのか検証する。そこには、社会と個人の関わり方の変化や、「写真＝ありのままの姿」という写真に対する認識の変化が見えてくる。

第３章では、表現としてのセルフ・ポートレイト写真について述べる。写真黎明期のイポリッド・バヤールのセルフ・ポートレイト写真をはじめ、リーフリードランダー、シンディ・シャーマン、森村泰昌、澤田知子の作品を中心に検証する。表現行為としてのセルフ・ポートレイト写真はある意味で一人芝居のようである。作家は作品の主題に沿って、自分自身を演出しデフォルメすることで、「もう一人の私」を作り上げる。写真という最終的な仕上がりが、撮影を得て、自身の肉体を離れ、フィルムに残ることから、自分の姿に対してより一層客観的にならざる得ない。主題に沿って自分の中にある人間性を拡大させ、ある人物像を演じることは、自分を他者化させる行為でもあると考える。

第４章では、博士展作品《世界のひとつ》について、その制作意図と実際の撮影方法について解説する。《世界のひとつ》では、「私の知っている自分」と「撮影時に私が見た風景」を共に撮影し、最終的に写真に写った「私の姿」と「他の物質」が同等の存在感で並んでいることを目指した。その為に用いた鏡と大判フィルムカメラについて、その理由を述べる。

終章では、研究・制作を通して得たことを述べ結論とする。セルフ・ポートレイト写真がもたらすのは自分自身の記録や共有、自己表現だけでない。自分という主体を使い、写真によって自分を世界の中で相対化させ、客観的に自分を見つめることができる。自己イメージと向かい合うことは、自分の生きる世界での在り方を模索・構築する上での大事な指針となる。写真に写る過去の自分を見つめることで、「そして、私はここ存在している」という、〈今〉に対する意識をより一層強くもたらしてくれる。会うことの叶わない存在でありながら、そこから決して離れることはできない自分という存在。そして、自分も世界も日々変わっている。生きていくということは絶え間なく変化し続けるということでもある。自己とは自分にとって一番身近であり一番遠い存在でもあるからこそ、人は変わり続ける自分と対峙する手段の一つとして、セルフ・ポートレイト写真を求めるのであろう。